

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00820

研究課題名(和文) 早期英語教育における「トランス・ランゲージ」アプローチの導入

研究課題名(英文) Introducing a "Trans-Languaging" Approach to Early English Language Education

研究代表者

植松 茂男 (Uematsu, Shigeo)

大手前大学・国際日本学部・教授

研究者番号：40288965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではコロナ禍のため、当初の小・中学校における研究を諦め、CEFL A1レベルの高い英語力を持つ日本人大学生に、その習得の道筋を聞いてみた。協力者(n=16)に、「英語との出会い」、「英語力のつけ方・維持方法」、「日本の英語教育」等をテーマに、約50時間半に及ぶ構造化インタビューを実施した。そのサマリによると、約半数の者が大学付属中学・高校時代に英語母語話者教員(n=10前後)によるインテンシブな授業を受けて英語力がついたと考えている。帰国子女も年齢相当の英語力がついたと言う。さらに学内校出身者以外では、幼少時代から英語塾やインターナショナル・スクールに親が投資し、通っていた者もいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は小学校外国語(英語)授業に「トランス・ランゲージング」(TL:Translanguaging)の概念を導入することにより、学習者が言語間優劣を感じることなくやり取りし、多様化する社会におけるコミュニケーションを成立させる教授法であるかどうか、効果検証を目指した。しかし長引くコロナ禍のため、研究対象と手法を変更せざるを得なくなり、申請者が勤務する大学の英語最上位クラスの学習者を対象とした、TL頻度、英語習得方法、維持方法などの半構造化インタビューを実施した。CEFL A1レベルの日本人大学生の英語力に関する貴重な資料であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we gave up our initial elementary school research due to the Corona disaster and asked Japanese university students with high English proficiency at the CEFL A1 level about their acquisition paths. About 50 and a half hours of structured interviews were conducted with the collaborators (n=16) on such topics as "Encounters with English," "How to develop and maintain English proficiency," and "English education in Japan. According to the summary, about half of the respondents thought that they gained English proficiency through intensive classes given by native English-speaking teachers (n=10 or so) when they were in university-affiliated junior and senior high schools. Returnees also say that they have gained English proficiency equivalent to their age. In addition, some graduates of non-affiliated schools had attended English-language cram schools or international schools since childhood, with their parents investing in these schools.

研究分野：第二言語習得論

キーワード：トランス・ランゲージング 英語力 早期英語教育 バイリンガル教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の申請当初の目的は、基盤研究(C) 課題番号 15K02805「小学校英語教育の教科化に向けた先進的な取り組み」(2015-2017)を多角的な角度から継続検証するものであった。

しかるに、研究初年度(2019年度)の研究実施時期(小学校側の要望により2020年3学期)にはコロナ禍が猛威を振るいはじめ、以降研究期間終了までの3年間、協力・準備をしていただいていた小学校では、生徒以外の外部者一切の立ち入りが禁止されてしまった。ズーム等遠隔による研究の取り組みの試みも提案したが、多忙を理由に不可の連絡を受け続けた。

当初、半年もしくは長くて1年と予想していたコロナ禍はその後なかなか収まらず、状況を見ながら1年半以上待機する異常事態となり、具体的なインストメンテーションに入れず、研究自体が滞ってしまった。研究3年目(2021年度)を迎えようとしても、この状態に改善の見通しが立たないため、申請者は研究対象と調査内容を、以下の通り変更することにした。

2. 研究の目的

「英語力の長期的な維持方法」を仮テーマに、申請者が勤務する大学において、普段トランスランゲージング(TL)の概念を使って英語の授業を行っているクラス(CEFL A1 レベル)を対象に、「いつ」、「どこで」、「どうやって」高い英語力を身につけたか、さらさらに「英語力の維持方法」、「日本の英語教育について」、「トランスランゲージングの頻度」等の質問を中心に、半構造化インタビュー分析を試みた。それにより、これまで量的研究で得られる *p-value* 値や、*Cohen d* 値、相関関係 からは causal を説明できず、極めて曖昧なデータしか得られない研究が限界であった。一方本研究は、ケースではあるものの説得力のあるファクターを「語り」によって明らかにしようとした。本研究協力者学習者は、帰国生も一般生も年齢相応の英語 4(5)技能力を維持しているか、その技能がどのように身に付いたのか、インタビューで切り込んだ。

3. 研究の方法

研究の趣旨を説明し、本人から協力の申し出があった20名の協力者に対しては、許諾書を交わした上でインタビューをズームを利用して授業外で行い、約50時間の動画収録を行った。動画を再生し、質的ソフト NIVIVO にコーディングすると共に、音声のトランスクリプトを作成した後、こちらもコーディングを行った。インタビュー手法としては、Kvale (1996)の半構造化インタビュー、Atkinson(1998)のライフ・ストーリー手法を採用した。

トランスクリプトに関しては、事実と異なる情報があっただけいけないので、それらの修正を目的に本人に2度にわたって修正・加筆を依頼した。その過程で数名から研究協力の辞退の申し出があり、結局16名分のインタビュー記録を、質的分析ソフト NVivo を使って質的分析を行った。

4. 研究成果

上述のように、CEFL A1 レベルの高い英語力を持つ日本人大学生(多言語・多文化環境で育った学習者を含む)に、高度な英語力習得の筋道をライフストーリー調で聞くのが本研究の独自性である。協力者(n=16)に、「いつ」、「どこで」、「どうやって」高い英語力を身につけたか、さらに「英語力の維持方法」、「日本の英語教育について」、「トランスランゲージング頻度」、「日本の英語教育についての私見」等、基本的な何点か以外は自由に語ってもらった。

それらによると、約半数の者(n=9)が著者の勤務する大学の付属中学・高校時代に、英語母語話者教員(n=10 程度)によるインテンシブな授業を受けて英語力がついたとはっきり述べたのが印象的であった。一日のうちに英語科目が2回ある日もあり、全ての英語授業が英語母語話者によって行われている。週単位では10時間を超えるこのインテンシブな英語環境が中・高6年間続く。

アサインメントで次回までに読む内容も最低50頁程度はあり、"To kill a mockingbird"等の分かりやすいものから始まり、高校ではシェイクスピアをテキストに何冊か取り上げて演じさせたり、一方で Kazuo Ishiguro の"Never let me go"をテキストに、数週間に渡って「クローニング」についてグループに分かれてプレゼンテーションをしたりして英語力を鍛えられたという。さらに毎回課題のサマリーを1000字から2000字で書いて次回に提出という、まさに「英語漬け」の状態であったという。何とか授業に遅れないように、通学の時間も読書して皆が競い合う環境であったという。

また、クラス内では、英語と日本語のトランスランゲージングが頻繁に聞かれたという。帰国子女(n=7)の者でも帰国当初に比べて年齢相当の英語力がついたと言う。それは現地に残っている同級生と久しぶりに会って話をして実感したという。普通の帰国子女のポキャブラリーの稚拙さは感じられない。

また特筆すべきは、一般校出身者(n=7)の中に、幼少時代から英語塾やインターナショナル・スクールに親が投資し、英語漬けになるような環境を探し当て、一貫して英語環境で育ってきた者(n=1)がいた。この学習者が今回 TOEFL iBT スコアが最高点であった。いわゆる「純ジャパ」でありながら、授業の工夫次第で、こうした高度なバイリンガルが育ち、維持できるのだと実感した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 植松茂男
2. 発表標題 学習者を活性化させるトランス・ランゲージングの試み
3. 学会等名 大学英語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植松茂男
2. 発表標題 学習者を活性化させるトランス・ランゲージング手法の試み
3. 学会等名 大学英語教育学会 関西支部大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------